魏志倭人伝を忠実に読んでの結果…

邪馬台（ヤマド）国はここだ。

酒井隆

はじめに

どなたも問題にされている魏志倭人伝の距離・方角・日程の三点のうち、日程以外は記述の通りにしました。文中のゴシック体（太字）のところは倭人伝の読み下だし文の一部です。

すでに刊行されている邪馬台国関係の書から多くの有益な考えを参考にさせていただきました。いちいち出典を記しませんが、その失礼をお許しください。なお表題の振り仮名のヤマドは、倭人の言った言葉を魏の使者は当時の洛陽古音で書いたのではと思われます。従って邪馬台国は「**ヤマド**」国に、卑弥呼は「**ヒムカ**」となります。

一、邪馬台国への道

郡従り倭に至るには海岸に循ひて水行し、韓国を歴て、乍は南し乍は東し、其の北岸の狗邪韓国に到る。七千余里。

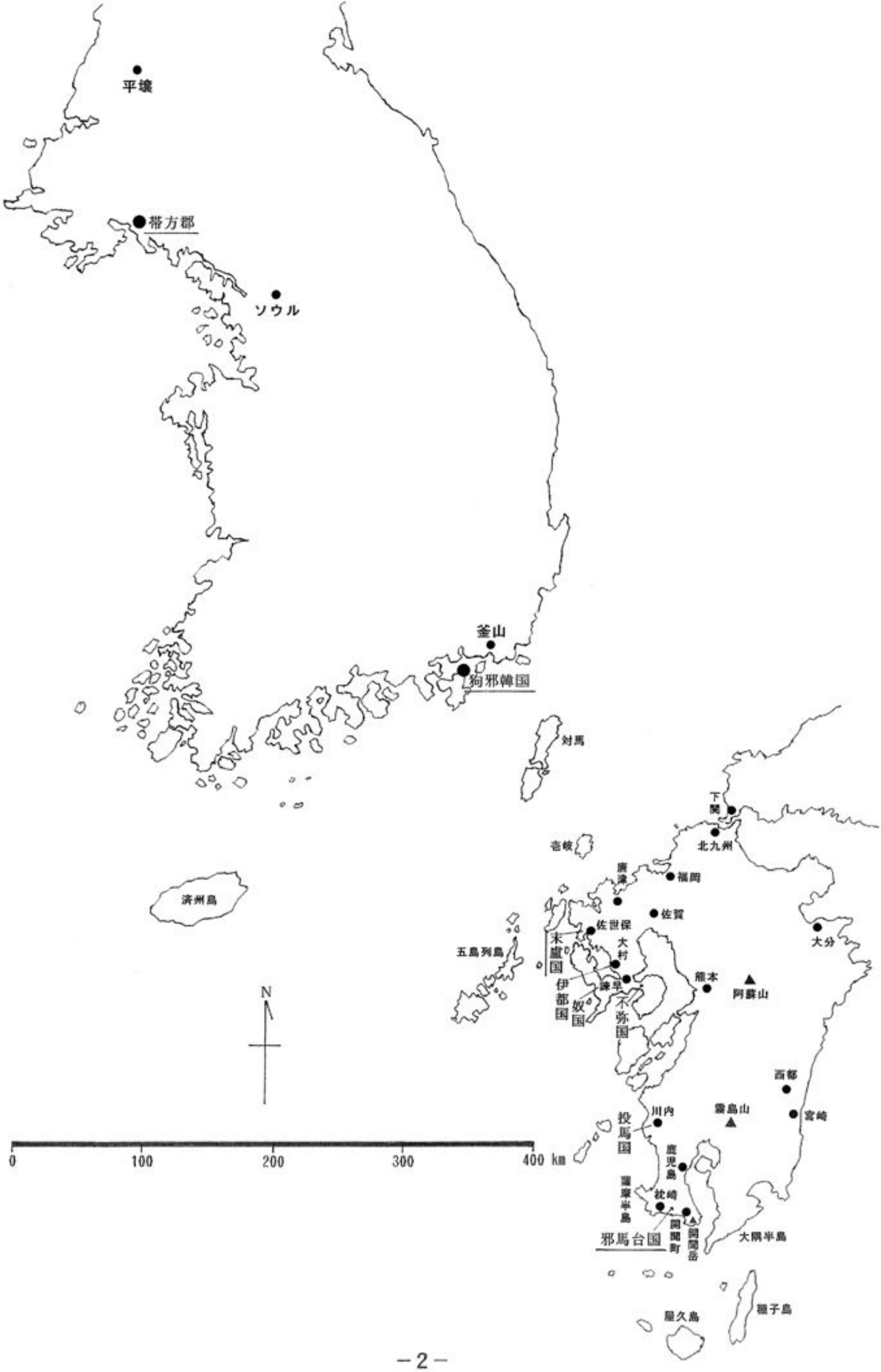
郡（帯方郡）は現在の平壌とソウルのほぼ中間の地といわれています。ここから釜山近くの所まで七千余里。これをいまの地図の上で測ると約７００㎞、単純計算で倭人伝中の一里は１００ｍになります。以下この計算で先へ進むことにします。

始めて一海を度ること千余里にして対馬国に至る。（略）**千余戸有るも、**（以下略）**又南に一海を渡ること千余里、名づけて瀚海と曰ふ。一大国に至る（壱岐）　三千許りの家有り。**

これも地図の上で、どちらも約１００㎞です。

又一海を渡ること千余里にして末盧国に至る。四千余戸有り、山海に浜ひて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず、好く魚鰒を捕へ、水の深浅と無く、皆沈没して之を取る。

ここでは方角を示していません。壱岐から１００㎞の地点を探すと、北九州市付近か長崎県の佐世保市近くになります。佐世保は北松浦郡内にあり地形も倭人伝の記述によく似ていますので佐世保を末盧国に比定します。


平壌
帯方郡
ソウル
釜山
狗邪韓国
対馬
下関
壱岐
北九州
唐津
福岡
済州島
佐賀
佐世保
大分
五島列島
末盧国
大村
伊都国
諫早
奴国
不弥国
熊本
阿蘇山
N
西都
宮崎
川内
霧島山
投馬国
鹿児島
薩摩半島
枕崎
開聞町
開聞岳
邪馬台国
大隅半島
種子島
屋久島
0
100
200
300
400 km

東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る。(略)千余戸有り。世王有るも、皆女王国に統属す。郡使の往来、常に駐まる所なり。

佐世保から東南50㎞は大村市付近になります。伊都国はいまで云う税関や検察機関のような役所があり、諸国の酋長たちの協定違反や勝手な中国との貿易などを監視。あわせて漁民などの個人的な密貿易や密漁（天然真珠など）も監視・取締まる役人たちがいた所だと思います。他に比べて人口が少ないのは役人とその家族たちが主に住んでいたからではないでしょうか。

東南して奴国に至るには百里。(略)二万余戸有り。

大村から東南10㎞が諫早です。地形的にも二、三世紀頃は東西南と海に近く、海上航路の起点としても重要な地だったのでしょう。

東行して不弥国に至るには百里。千余家有り。

東へ10㎞、現在の諫早市と雲仙市との境界付近の海岸になります。（諫早市森山町か雲仙市愛野町）船着き場だけの小国でしょう。

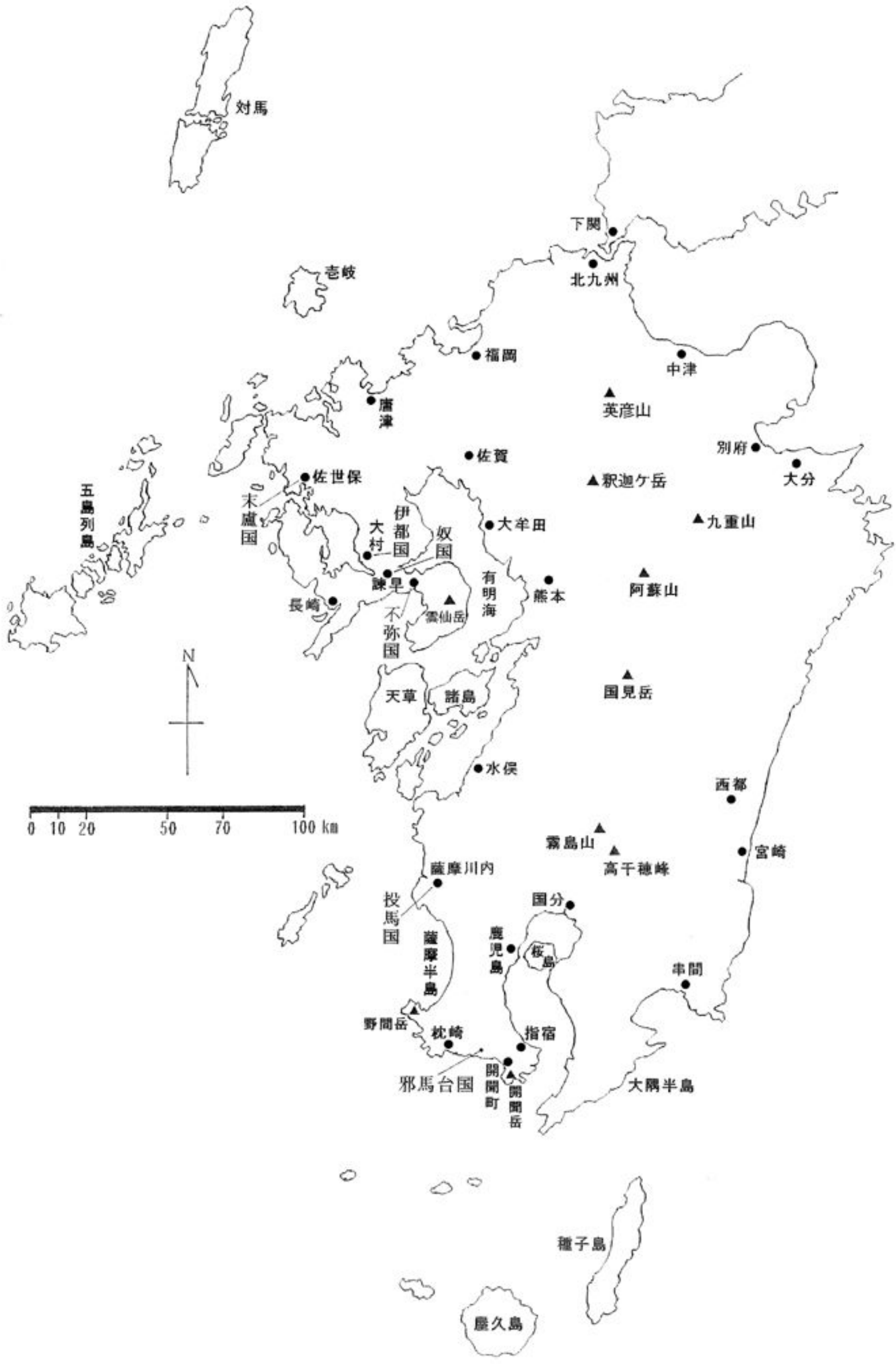
南して投馬国に至るには水行すること二十日、五万余戸可り。

ここでいう二十日は決まりきった所要時間（日数）ではなく、魏の使節団が前年約束した鏡百枚やその他の好物を持参して、途中の港に寄ったりその近くを視察した上での二十日間だったと解釈します。

投馬国は鹿児島県の薩摩川内市を比定してみました。当時、川内川はいまより深い入江になっていて良港だったとのこと。距離的にも不弥国から沿岸航法で約１２０㎞、中継地としても最適でしょう。

参考までにこの時代（２４０年）から約七百年後の９３４年に紀貫之が任地の高知市から大阪湾の旧淀川口までの日程が「土佐日記」に書いてあります。それによると約２８０㎞の船旅が37日間。12月だったこともあり天候不良などで船泊まりを余儀なくされたからでしょうが、毎日走っていれば11日位で済んだと思います。

不弥国から投馬国まで１２０㎞、寄り道や船泊まりで20日間かかってもなんの不思議はありません。


対馬
壱岐
下関
北九州
福岡
中津
唐津
英彦山
佐賀
別府
大分
佐世保
釈迦ケ岳
末盧国
五島列島
伊都国
大村
奴国
大牟田
九重山
諫早
有明海
熊本
阿蘇山
長崎
不弥国
雲仙岳
N
天草
諸島
国見岳
水俣
西都
0 10 20 50 70 100 km
霧島山
宮崎
高千穂峰
薩摩川内
投馬国
国分
鹿児島
桜島
薩摩半島
串間
野間岳
枕崎
指宿
邪馬台国
開聞町
開聞岳
大隅半島
種子島
屋久島

南して邪馬台国に至る、女王の都する所、水行すること十日、陸行すること一月、(以下略)

邪馬台国は鹿児島県南部の枕崎から開聞町、指宿市の間の海岸に近い一帯だと思います。ここの水行十日、陸行一月も投馬国までと同じようにかかった日数です。前と違って単に寄港しただけでなく、もっと奥まで泊りがけであちらこちらを視察したのでしょう。魏の使節にとっては初めての土地ですから、特に時間をかけて入念に調べたことと思います。倭人伝中の、詳しい産物ほかの記事がその成果の表われだと思います。

水行だけなら十日、水行陸行を重ねたので一月かかったと解釈します。この度、現地を歩いての感じでは水行なら十日、陸行なら一月もあり得ると思いました。魏の使者は二回来ていますから、それぞれ水行と陸行を実行したのではないでしょうか。このほうが正しいような気がします。

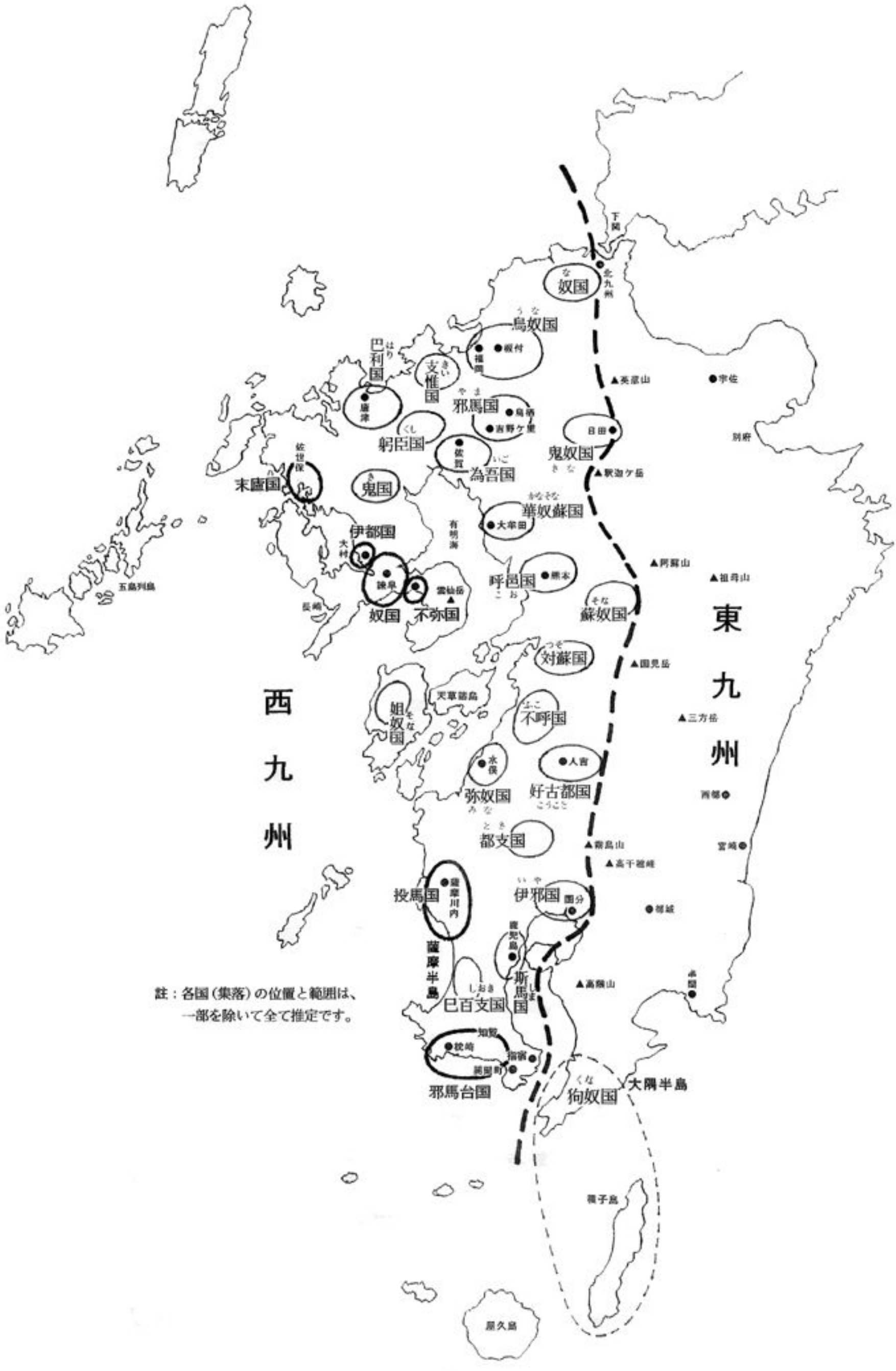
二、邪馬台国と周辺の国々

女王国自り以北、其の戸数・道里は略載することを得可きも、其の余の傍国は遠絶にして詳かにすることを得可からず。次に斯馬国有り、次に巳百支国有り、(以下略)**次に烏奴国有り、次に奴国有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国有り、男子を王と為す。女王に属さず。**

女王国(邪馬台国)から見て北のほうの国々二十一ヶ国が記してあります。私の考えでは左頁の地図のような、九州を縦半分にした西九州がここで云う倭国かと思います。まさに西九州連合国とでも言えそうです。これに対して女王国の南にある狗奴国の王は、もしかして卑弥呼の弟ではないかと愚考してますがどうでしょうか。

郡より女王国に至るには万二千余里。(略)**七万余戸可り。**

帯方郡より邪馬台国まで一万二千余里、計1200㎞になります。帯方郡から釜山近くまで700㎞、対馬まで100㎞、壱岐まで100㎞。末盧国(佐世保)まで100㎞。伊都国、奴国、不弥国まで計70㎞。不弥国から水行で、投馬国を経由して邪馬台国までが約200㎞、合計して1270㎞。単なる偶然とはどうしても思えません。



註：各国（集落）の位置と範囲は、
一部を除いて全て推定です。

三、卑弥呼の墓と金印は何処に…

倭の地は温暖にして、冬夏生菜を食し、皆徒跣なり。（以下略）**其の死には棺有るも槨無く、土を封じ冢を作る。**（以下略）**卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径は百余歩、葬に徇ずる者は百余人。**（以下略）

倭の地温暖とありますから、特に鹿児島県南部はぴったりでしょう。卑弥呼の墓は高大な墓でしょうが意外と質素な作りではないかと思います。

当時、魏では薄葬主義を唱えていて、森林などを壊すような造営は止めてなるべく自然の地形を生かすようにとのことです。二回目の魏の使節の張政が邪馬台国に滞在中に女王の死に出会ったようですから、葬儀のことなどで倭人から相談を受けあれこれ助言したことでしょう。張政も薄葬を薦めたと思います。その一例として和歌山市内にある岩橋千塚古墳群のうちの井辺八幡山古墳が参考になりそうです。私も現地を見てきましたが、確かに普通の山に見えこれが古墳とは感じられませんでした。

西方向から見た井辺八幡山古墳の一部

周の時代、一歩はふた足の長さで1m35cmと云いますから百余歩は約150mになります。従って直径が150mか、墓の長いほうが150m位の規模のものと推察します。

本年（平成20年）初めて鹿児島県南部を訪れてみました。この一帯でこれに該当しそうな所を、地形などで推理してみたのが最終頁の概略図上の赤い印の所です。（それぞれの位置は2万5千分の地形図を基に探してみました）

倭人伝中の「大いに冢を作る。」を人によっては大冢の意味で規模が大きく副葬品その他も豪華だと想定してますが、むしろ高大な冢と解釈したほうがよいのではと思います。この時代よりずっと後のことになりますが、墓が独立した山の頂上にある例があります。1598年に豊臣秀吉の遺命により死去したその年に建てられたのが、京都市内にある阿弥陀ヶ峰頂上の豊公墓です。標高約200mの自然の山に一直線の石段があるだけで墓も質素な小規模の霊廟のみで、東照宮の華麗さとは対照的にかえって荘厳な感じがしました。

薩摩半島南部一帯の平野部に昔から人工の築山があれば、なんらかの言い伝えがあったはずです。そ

枕崎駅前から見た片平山、右側はもっと伸びている

枕崎の市街から眺めた園見岳

れが無いようですから矢張り自然の地形を生かした所だと思います。

卑弥呼の墓も100mから400m前後の独立した山で、頂上がほゞ平坦で広い面積のある山が候補地ではないかと思います。当時は被葬者を埋葬したらそれで終りとし、再びそこへは訪ねない事になっているそうです。とは云っても臨時の登山道が必ずあった訳ですから、その跡が残っていないか探して見ます。その上、頂上に墓標らしい物がもしあれば可能性大になりますが…幸運を期待しながらあちらこちらを歩く事にしました。

四、卑弥呼の墓を尋ね歩く

A・園見岳 地図にある頂上近くまで行ける道が見つからず諦めましたが、もう一度調べる必要があるかも知れません。

B・片平山 今は凸凹してますが前はごく普通の形の山だったとのこと。片平山の海岸寄りにある祠は昔からあったと言われているそうです。

この祠のすぐ後ろの丘に不揃いの積み石のようなものが露出してました。コンクリート製のベンチが置いてあるだけの手つかずの丘のようです。

C・岩戸山 頂上に登る道を探しましたが一箇所だけあったそれらしい道も20m位行った所で消えてしまいました。仕方なく許可を得て岩戸鉱山の作業用道路の奥まで行ってみたのですが駄目でした。ただ職員の方のお話しでは、頂上か頂上手前に祠が昔からあるとのことでした。

D・国見岳 少年の森からの山道で頂上へ行けました。山頂はさして広くなく巨大な石があるだけで石の周りも造作したような跡もないようなので軽視しました。途中の祠も巨岩信仰の一つかと思われます。

E・大野岳 念のため登ってみましたが観光の山でした。しかし展望は超一流の素晴らしさでした。

片平山の祠

祠の真後ろの丘の、一部露出している積み石らしい石の現場

今回、現地を歩いてみた上での私なりの結論は、邪馬台国は枕崎を中心とした知覧の南部一帯と頴娃を含む広大な地かと思います。枕崎が魚介類を供給、知覧は里芋などのでん粉類、頴娃はお米と野菜類をそれぞれ供給しあって七万余戸の人口を保持したのではないかと思われます。

卑弥呼の墓は山の名の通り岩戸山の主峰に、そしてもしかして片平山は殉死した人々の合同の墓ではないかと感じました。素人なりの結論ですが、ご検討いただければ幸いこの上なしです。

枕崎の海岸方向から見た岩戸山、写真右の平坦な所が主峰　岩戸鉱山はその右奥にある

追記

この度の邪馬台国へ辿り着く旅は、偶然にも天照大御神から神武天皇への五代にわたって登場する方々の御陵や神社を巡る旅にもなりました。佐世保の **玉依姫神社**、(途中なので由緒のありそうな川棚町の豊姫神社)、川内の **可愛山陵** と、**木花開耶姫** の陵といわれている端之陵、木花開耶姫が子達を産んだ地と伝えられる金峰町、知覧の **豊玉姫神社**、鹿屋の **吾平山上陵**、溝辺の **高屋山陵** と行ってきました。

地図の上のことですが、この様なことは北九州にも宮崎・大分の東九州にもなく、下関から近畿地方(大和)に向かう瀬戸内海沿岸にも日本海沿岸にもいっさいありません。倭人伝中の距離の偶然といいこの偶然といい、何か史実を伝えているように思えてなりません。

邪馬台国比定地の概略図

（薩摩半島南部一帯）

酒井　隆（さかい　たかし）

１９２８年東京都生まれ。１９４６年、父親の郷里でもある熊本朝日広告社に図案係として入社。１９５０年退社後上京、同年エスエス製薬宣伝課に勤務。１９５５年退社後フリーの商業デザイナーとして１９９３年まで現役、後リタイアして現在にいたる。